

いわて 東日本大震災



「建てて終わりじゃない」と木製の碑の前で決意する大槀高の2年生。(左から)
吉田優作君、小林春美さん、佐々木郁実さん、黒沢菜緒佳さんは大槀町安渡

「手間」が命をリレー

焦点

木製の砧を建てる

東日本大震災で
壊に学校があつた
流失、住民12人が
は仮設住宅団地が
「スのテント」「ふ
民主体のお茶つこ

残すだけでは、その存在すら忘れられてしまふかもしない。数百年、数千年後には、現在住んでいる人たちが使っている言葉さえ、変化している可能性もある。

吉田君らは記念碑に、腐つて朽ちていく木材をあえて用いることで、建て替えを地域の行事として継承することを目指している。「形」ではなく「行為」そのものを後代に伝えていくという手間が掛かる手法は、現代では逆に斬新でユニークに思える。

大津波への対策は、世紀を超えた想像力が欠かせない。吉田君らの行動が、地域の歴史や文化を含めた大きな視点で、町全体の防災を考えるきっかけになればと願う。

つまりければ地域の「祭り」のようなスタイルになるかもしない。大植の「命」を次世代にリレーする取り組み。何年かに一度、町民が気勢を上げ、木製の碑をみこしのように担ぎ、浜から高台へ向かう姿を思い浮かべるのは、私だけだろうか。

(釜石支局・遠藤大志)

「まくいには地図の
祭り」のようなスタイル
になるかもしけない。
大槀の「命」を次世代
にリレーする取り組
み。何年かに一度、町
民が気勢を上げ、木製
の碑をみこしのように
担ぎ、浜から高台へ向
かう姿を思い浮かべる
のは私だけだろうか。

吉田君は震災発生時、同町栄町の友人宅にいた。地震の後、町の空気が一瞬、止まつた感じがした。
「あんとく高台へ」。大槀校長は渡地区の通称「古学」地域の住宅地に、津波避難を呼び掛ける木製の碑が立っている。ただの記念碑ではない。やがて朽ちる木材をあえて使いい、住民自身が建て替えていくことで、避難の教訓を風化させまいという「逆転の発想」を込めた碑だ。
大槀高2年の吉田優作君ら地元高校生が中心になつて企画、今年3月11日に設置した。場所は一帯に津波が到達した最高地点付近。コンクリート製の土台を含めて、高さ約1割に上る1200人以上が犠牲となつた同じことか

震災前、1933（昭和8）年の大津波の教訓を伝える石碑が立っています。吉田君自身、石碑があつた同町末広町の広場付近でよく遊んだが、内容までは特に意識しなかったという。「石碑が立

古学校地域からて地域に学校があつたのが名前の由来とされる。東日本大震災では民家約60世帯のうち約半数が流失、住民12人が犠牲になつた。地域内の高台には仮設住宅団地が整備され、コミュニティースペースのテント「ふれあいドーム」で月に数回、住民主体のお茶っこの会などが開かれる。

したくない 街は壊れて
も、命があればやり直し
はできる。津波の記憶と
教訓を、後世に伝えてい
くことこそが責務と感じ
ている。

ただ、形を残す取り組
みだけでは意味がないと
知った。いつまでも忘れ
ないためには、住民自身
の行動にして、教訓を繼
承しなければ。多くの
人と相談した結果が、建
て替えが必要な木製の碑
になつた。

町内の中高生向けに民
間団体が開く「放課後学
校」の友人3人とともに、
地域住民と津波の記憶を
継承する意見交換会を今
年1月から始めた。碑の
文言はこの話し合いから
導き出した。

吉田君は津波の教訓を
踏まえ「一度は高台に逃
る。

地元高校生が主体とな
った取り組みに、同町安
渡の小国忠義さん(72)は
「若者の頑張る姿がうれ
しい。地域も全面的に協
力したい」と期待する。
「実は自分の中에서도、
風化が始まっているかも
しれない。ぼうぜんとす
るだけだった震災後の町
の風景に、違和感を感じ
なくなっているから…」
そう明かす吉田君は
「これからが記憶の風化
を防ぐ本当のスタート。」
木製の碑の建て替えが地
域の伝統として根付くよ
うに考えていいきたい」と
前を見据えながら決意す

教訓

古学校地域の木製避難碑

大植町



建て替えて記憶継承